

『遊仙窟』 文法稿案

『長田夏樹論述集（上）』第8章

（原載：『神戸外大論叢』第7巻第5号，1957年2月）

原題は『遊仙窟』文法稿案（上）、唐・張文成『遊仙窟』の文法体系を記述しようとしたものである。論文の構成は第1節「序説」、第2節「名詞」、第3節「動詞」であり、他の品詞については（下）で述べるべきところ、未完に終わったものと思われる。

なぜ『遊仙窟』の文法記述が必要とされるのかという点についての議論は「序説」に見られる。著者によれば、中国語史において唐代は隋・五代とともに中古中国語後期（601-950）に属し、この期はさらに安祿山の乱を境として前半（601-765）と後半（766-950）に分けられるが、『遊仙窟』は中古中国語後期前半の言語相を反映するものとして、資料年代学上の尺度とするに適格であるという。その理由としては、早く佚書となったことで同時資料に準じるものと扱いきれず、駢文・会話・詩といった多様な表現形式を交互に用いるにも拘わらずほぼ単一の言語相を示しており、これが口頭語の反映と考えられること、また文学史的に見て変文等の俗文学への橋渡しとなる存在であること等を挙げている。劉堅・蔣紹愚主編『近代漢語語法資料彙編・唐五代卷』（商務印書館，1990）の巻頭を飾るのが『遊仙窟』であるという事実は、著者のこうした見通しに誤りのなかったことを示している。

本論文において文法を記述するにあたって著者が採用した分類は精緻なもので、動詞を例にとると、「動詞の分類」として①完全自動詞、②情意・意思の動詞、③及処動詞、④存在動詞、⑤連繫動詞、⑥完全他動詞、⑦心理過程・状態の動詞、⑧及物動詞、「動詞の構成」として①固定複音動詞と②複合動詞、「補助動詞」として①運動・動作の方向・位置及び意思・心理の趨向を表わすもの、②動作・行為の情形・結果を表わすもの、③運動・動作の結果・程度を表わすもの、④動作・行為の形態・目的を表わすものを立てており、意味と構成の両面に気を配っているところがユニークである。これは、本論文とほぼ同時期に出版された太田辰夫『中国語歴史文法』（1958）における動詞分類が構成を基本にしているのと対照的であり、こうした分類が他の品詞についても完遂されていれば、後学を裨益すること大であったろう。

なお、本論文は未完となったが、著者自身による『遊仙窟』文法の全体像は、『中国語学新辞典』（1969）の項目「遊仙窟」によってその一端を窺い知ることができる。（竹越孝）